

2013 年度 研究所・センター事業報告書

研究所・センター名	地域情報研究センター
研究所・センター長名	岸 道雄

I. 研究成果の概要（公開項目）

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5 ヵ年)および 2013 年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうことができるだけわかりやすく記述してください。なお、2013 年度に採択を受けた研究所重点プロジェクトの実績報告は、別紙「研究所重点プロジェクト実績報告書様式」(非公開)に記述のうえ提出してください。

地域情報研究センターでは今年度も総合計画に基づき、地域のコンテキストに根差した実践的な知の蓄積を目指すべく、地域公共政策、低炭素社会を理念とした農村地域の経済・社会的活性化、地域コミュニティの防災・安心安全等をテーマとした実践的な政策研究を推進するための研究基盤として、その機能の強化と充実を図った。具体的には、以下の 3 つのプログラムを重点的に行った。

1) OIC における研究展開を視野に入れた萌芽的共同研究プログラム

2015 年度の OIC 移転を視野に入れながら、地域情報研究センターの学際的な政策研究拠点としての機能を強化すべく、経営学部との共同研究プロジェクトを立ち上げ、デザイン科学、イノベーション・マネジメント、MOT、医療経営、都市地域共創、比較政策の 6 つのテーマの萌芽的な研究を進める予定であった。しかしながら OIC 研究所の発展改組にかんする WG の協議において、BKC 社系研究機構のような形態の組織の構想が提示され、OIC 関係学部・研究科の教員を中心とした複合的な研究領域の拡大という方向となったため、今年度の共同研究の場づくりの試みは一旦停止とした。

2) 汚職・不正入札の防止政策に関する研究

今年度の到達目標は、政府公的部門の倫理規範についての概略的整理および歴史的背景の概観と、それに基づく国際比較研究の枠組み構築であった。特に入札制度を事例として取り上げ、その運用上の諸課題の抽出を目指した。しかしながら研究代表である前センター長が、今年度途中で立命館 APU 副学長として移籍となったため、秋学期以降の定期的な研究会開催が困難となった。したがって、本プログラムの実施はやむをえず延期とし、新たなセンター長への交代を機に、研究所総合計画を見直すこととした。

3) 地域主体の低炭素社会実現を目指したカーボンマイナス・プロジェクト

農地炭素貯留と環境保全型ブランド農作物を柱とした地域政策スキームの実証研究を、京都府亀岡市をモデル地区として継続的に実施した。農地炭素貯留を認証するデータベース・システムを試験的に運用し、ウェブサイトでの貯留量の視覚化と公開を開始した。また農地炭素貯留の作物への影響を評価する圃場実験(2 年目)を行い、固定炭素量や土壌データ等の蓄積が進められた。さらに、環境保全型ブランド農作物の受容可能性を検討するために、すでに小売店での販売が始まっている「クルベジ」ブランドの購入者を対象として、購入頻度や動機等の店頭調査を実施した。あわせて、環境保全価値に対するより一般的な態度を把握するために、ウェブ上での質問紙調査を実施した。農地炭素貯留の認証機関である「京都炭素貯留運営委員会」(地域情報研究センター、龍谷大学、京都大学、亀岡市等)や、「クルベジ」ブランドへの参画農家の組合である「亀岡クルベジ育成会」の運営も継続・発展的に実施しており、スキームの社会的な実装が着実に進捗しているといえる。

4) 地域政策に関する国際研修プログラム

チュラロンコン大学環境研究所との研究協定締結と国際 WS 開催に 13 名の参加、国際シミュレーション&ゲーミング学会・第 10 回サマースクール 2013 の開催参加に 67 名、昨年度に引き続き、インドネシア政府より、地域の防災および安心安全分野の若手政策担当者を受け入れ、研究プログラムを通じた人材育成と、本学学生等との研究交流を行った。本プログラムは、地域情報研究センターの総合計画にも重点的取り組みとして位置づけられ、継続的な受け入れを目指しているものであり、今年度も 3 名の受け入れが実現した。プログラムでは、京都市内等のフィールド研究や、本学学生とのワークショップおよびディスカッション、研究報告等を行った。研究成果は、地域情報研究センターの紀要に収められ、センターのウェブサイトで閲覧できるよう公開されている。また、受け入れ側のスタッフとして継続的に参加していたインドネシア人留学生・博士後期課程大学院生が博士学位を取得し、本国の地域自治体の政策担当者として勤務を始めた。本プログラムの今後の発展が期待されるところである。

II. 研究業績（公開項目）

本欄には、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。（2014年3月31日時点）

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1.	鐘ヶ江秀彦	「炭素埋設農法を通じた持続可能な地域開発・亀岡モデル」 『都市・地域・環境概論—持続可能な社会の創造に向けて』	分担執筆	2013年4月	朝倉書店	大貝彰・宮田譲・青木伸一（編著）	16章
2.	鐘ヶ江秀彦	「サステイナビリティの構築（気候変動への対応）災害と都市」 『サステイナビリティ学入門』	分担執筆	2013年4月	法律文化社	周璋生（編著）	第3部
3.	Shibata Akira and Steven McGreevy	“Mobilizing Biochar: A Multi-Stakeholder Scheme for Climate-Friendly Foods and Rural Sustainable Development” <i>Geotherapy: Innovative Methods of Soil fertility Restoration, Carbon Sequestration, & Reversing CO2 Increase</i>	分担執筆	2013年10月	CRC Press	T. Goreau, R. Larson and J. Campe (ed.)	pp. 12~13
4.	鐘ヶ江秀彦	「炭素埋設農法を通じた持続可能な地域開発・亀岡モデル」 『都市・地域・環境概論—持続可能な社会の創造に向けて』	分担執筆	2013年4月	朝倉書店	大貝彰・宮田譲・青木伸一（編著）	16章
5.	鐘ヶ江秀彦	「サステイナビリティの構築（気候変動への対応）災害と都市」 『サステイナビリティ学入門』	分担執筆	2013年4月	法律文化社	周璋生（編著）	第3部

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	関谷諒・柴田晃・鐘ヶ江秀彦	バイオ炭の農地貯留に対するライフサイクルの観点からの二酸化炭素削減効果に関する研究—水田・畑地におけるメタン排出削減を含めた炭素貯留農法を事例として	共著	2013年9月	木質炭化学会, 木質炭化学会誌, 10巻1号		pp.22~34	有
2.	田藤裕祐・本多彩夏・柴田晃・鐘ヶ江秀彦	農地炭素貯留から派生する環境保全型ブランド野菜の受容可能性—消費者の価値評価の計量分析	共著	2014年3月	立命館大学地域情報研究センター, 創地共望, 3巻		pp.39~49	無
3.	西出崇	野菜の付加価値に対する消費者の認知構造—既存の価値との関係からみる「環境保全」価値の受容可能性	単著	2014年3月	立命館大学地域情報研究センター, 創地共望, 3巻		pp.51~61	無
4.	上田昌志	馬路大納言小豆を対象作物とした農地炭素貯留栽培実験の経過報告	単著	2014年3月	立命館大学地域情報研究センター, 創地共望, 3巻		pp.71~77	無
5.	井上芳樹・柴田晃	バイオ炭中の難分解性炭素に関する規格案の検討	共著	2014年3月	木質炭化学会, 木質炭化学会誌, 10巻2号		pp.74~86	有

6	Wignyo Adiyoso and Hidehiko Kanegae	Effectiveness of Disaster-Based School Program on Students' Earthquake-Preparedness	共著	2013年10月	Journal of Disaster Research, Vol.8, No.5		pp. 1009-1017	有
7.	Wignyo Adiyoso and Hidehiko Kanegae	Efektifitas Dampak Penerapan Pendidikan Kebencanaan di Sekolah terhadap Kesiapsiagaan Siswa Menghadai Bencana Tsunami di Aceh, Indonesia	共著	2013年12月	Penanggung Jawab, BAPPENAS, "Perencanaan Pembangunan" EDISI03		pp. 57-66	有

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	Shibata Akira	CO ₂ Mitigation and Rural Development through Farm Land Carbon Storage by Biochar and Environmental Friendly Vegetable Cool Vege	2013年5月	International Conference on Solid Waste 2013, Hong Kong	
2	柴田晃	亀岡カーボンマイナス・プロジェクト現況報告	2013年6月	第11回木質炭化学会研究発表会	
3.	柴田晃	農地炭素貯留による地域開発プロジェクト:進捗報告」	2013年8月	平成25年度日本バイオ炭普及会大会, 九州大学	
4	上田昌志・柴田晃	小豆の生育に対するバイオ炭の影響評価と炭素貯留効果 (ポスター発表)	2013年8月	平成25年度日本バイオ炭普及会大会, 九州大学	
5.	Shibata Akira	Cool Villages	2013年10月	US Biochar Initiative, 2013 USBI North American Biochar Symposium, University of Massachusetts, USA	Steven McGreevy
6.	豊田祐輔・鐘ヶ江秀彦	既存の防災コミュニティ支援ツールによる地域の文化遺産防災への効果	2013年07月	第7回歴史都市防災シンポジウム	
7.	豊田祐輔・鐘ヶ江秀彦	地震時における避難行動の意思決定プロセスに関する研究: 京都清水寺周辺地域をケーススタディとして	2013年07月	第7回歴史都市防災シンポジウム	崔青林・谷口仁士・伊津野和行
8.	鐘ヶ江秀彦	コンパクトシティのレジリエンス強化のための移行手順のオントロジー化に向けて	2013年10月	日本地域学会 第50回(2013年)年次大会, 徳島大学	熊澤輝一
9.	Hidehiko Kanegae	Community Planning for Disaster Mitigation: Kyoto, Japan: Gaming Simulation, Risk Assessment and communication	2014年3月	International Seminar on Urban Gaming Simulation Theory & Practice, Sassari University, Alghero, Italy, URRGES (Urban Risk Resilience Gaming Experience Simulation)	
10.	Hidehiko Kanegae	Gaming simulation and problem-based learning under pressure of climate changes and disaster century, a new fusion learning ways toward virtual players and actors in reality	2014年3月	6 th International ThaiSim Conference, 31 March – 1 April, 2014 (Mon - Tue), Southeast Bangkok College, Bangna, Bangkok, Thailand	

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	クルベジ円卓会議	亀岡市役所	2013年9月	50名	龍谷大学 LORC

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1.	柴田晃	「クルベジ苗植えに汗:亀岡で催し、府内各地から40人」	京都新聞	2013年4月28日
2.	Shibata Akira	GHG Reduction Area Brand Agricultural Products to Sustain the Environment	Workshop on Biochar Promotion in Wetland of Indonesia, Bogor, Indonesia.	2013年7月12・13日
3.	柴田晃	「マンガ・DVD でエコ農法—亀岡市・龍谷大, 教材作成」	朝日新聞	2013年8月14日
4.	柴田晃	「亀岡のクルベジ認知度アップを—生産者や主婦, 意見交換」	京都新聞	2013年9月2日
5.	柴田晃	「放置竹林活用に関心—欧州の学者ら「クルベジ」農法視察」	京都新聞	2014年1月29日
6.	柴田晃	「CO2 削減農法で地域振興—放置竹林伐採, 炭にして畑に」	京都新聞・丹後中丹版	2014年2月17日
7.	Hidehiko Kanegae	Staff Enhancement Program Professional Human Resources Development Project (PHRDP) III National Development Planning Agency (Bappenas), Indonesia 2013	立命館大学・地域情報研究センター	2013年10月~11月

6. 受賞学術賞				
No.	氏名	授与機関名	受賞名	受賞年月

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1.	柴田晃	未利用木質バイオマスを用いた炭素貯留野菜による CO ₂ 削減社会スキームの提案と評価	基盤研究 (B)	2011年4月	2014年3月	代表
2.	鐘ヶ江秀彦	逆都市化における頑強性を高めるコンパクトシティ政策シミュレーションに関する研究	基盤研究(B)	2011年4月	2014年3月	代表

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1.	柴田晃	亀岡カーボンマイナス・プロジェクトに係る調査研究	亀岡市受託研究	2013年7月	2014年3月	代表
2.	柴田晃	クールライズ実用化可能性調査	農林水産省, 緑と水の環境技術プロジェクト事業	2013年12月	2014年3月	分担
3.	鐘ヶ江秀彦	エージェントシステムを用いた住民主体のリスクコミュニケーション支援ツールの開発と活用	立命館大学研究高度化推進制度・研究推進プログラム・基盤研究・災害研究枠	2013年8月	2014年3月	代表
4.	鐘ヶ江秀彦	地域政策に関する国際研修プログラム	立命館大学・研究所重点研究プログラム	2013年4月	2014年3月	代表
5.	鐘ヶ江秀彦	世界文化遺産アユタヤにおける地域受容を考慮した洪水回避策の実施方策に関する研究	立命館大学研究高度化推進制度・研究推進プログラム・基盤研究	2013年4月	2014年3月	代表
6.	鐘ヶ江秀彦	農山村部におけるクールベジタブル農法を核とした炭素隔離による地域活性化と地球環境変動緩和方策に関する人間・社会次元における社会実験研究	R-GIRO 研究プログラム・特定領域型 R-GIRO 研究プログラム	2013年4月	2014年3月	代表
7.	宮脇昇	平成 25 年度坂の上の雲ミュージアムに関する資料調査業務委託	松山市受託研究	2013年6月	2014年3月	代表

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録(特許)番号	国

以上。